そして天命を成就する

ゆこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そして天命を成就する

【Ｎコード】
Ｎ７４５６Ｘ

【作者名】
ゆこと

【あらすじ】
神童と呼ばれる異能力者が存在する世界。その異能を人々は神業と言い、世界の趨勢はそれらに左右されていた。国立天野岩学園に入学した主人公は、己の天命を無事成し遂げるために日夜奔走していく。謎設定が盛りだくさん！主人公最強系学園ファンタジーです。

入学試験道中にて（前書き）

プロローグ

入学試験道中にて

1月も後半に差し掛かり、正月のどこか浮ついた雰囲気は霧散霧消してしまっている。いや、霧散霧消どころか自ら好き好んで打破している人種が存在しているくらいだ。それが受験生と呼ばれる部類の人達であり、ご多分に漏れずというべきか、この俺伊滄（いそう）　諾（だく）もその内の一人だ。そして今日が運命の受験当日であり、昨日までどこ吹く風と平常運転だった俺の心臓も心なしか鼓動周期が早くなっている気がする。自分でも心臓の脱毛っぷりには呆れてしまうものの、どこか懐かしい緊張からくる浮遊感のような感覚を楽しんでいるのもまた事実だ。

俺が受験し、近い将来在校生一覧に名を連ねようと一計を案じている学校は、日本でも有数の名門かつ専門かつ有名な高等学校である国立天野岩学園（こくりつあまのいわがくえん）だ。この天野岩学園とは、全国でも１３ヶ所しか存在しない“神童”育成を目的とした高等学校であり、１３の学校の頂点に君臨している。そのため毎年優秀な生徒が我こそはと受験を受けに来るのだ。

天野岩学園は淡路島に創設されており、実家が遠く離れた場所にある受験生は前日、より確実性を求める受験生は2日前から淡路島へと来島している。俺も昨日ホテルへチェックインした受験生の１人だが、抜かりなく受験会場への道筋は調べていたためホテルから学園への道筋に迷うことはない。早朝ホテルを出てから３０分ほど歩いているもののその足取りに不安はなく、そろそろ学園の姿が拝めるかもしれないと思案していた時である。

先程からちらほら伺えるようになった受験生の中に、まるで肩が常人の3倍ほどの重さなのでは無いかとこちらの思考を不明瞭にさせるほどに肩を落としている女の子を見つけた。どうやら学生服なところを見ると、彼女も周囲の学生と同じく受験生であろうことは容易に察することができたが、にしても妙な空気を纏っている。確

かに受験生は誰でも多少の焦燥感や緊張感を持ち合わせているものだが、彼女のそれはむしろ落胆や諦めといった負の色が濃い印象だ。このままのコンディションでテストに挑もうものなら満足行く結果は望めないだろし、周りを見ても彼女に手を貸してあげようといったメシア的存在が現れる様子もない。

「ま、仕方ないな」

正直多少は緊張しているものの、俺は試験自体に全く憂いが無い。ここで彼女の学業成就に尽力するくらいの心の容量は空いているのだ。

昨日から「チェックインお願いします」しか発していない運動不足の発声器官に軽く仕事させておくのもアリだろう。よし、声を掛けてみよう。

「どうも、おはようございます」

「えっ、あ・・・お、おはようございます」

うむ？人見知りなのだろうか。だとしたら余計な緊張をさらに背負わせてしまったかもしれない。彼女の肩は定員オーバーじゃなかろうか。もっとも、初対面の人にいきなり挨拶されても困惑するのは当然といえば当然だが。

ここは緊張をほぐしてあげよう。

「なんだか、海に潜って1分ほどの海女さんのようでしたので」

「あ、海女さん・・・？」

「つまり浮かない様子だったという事です」

「あ、あぁ成る程・・・」

どうしよう、張り詰めた空気を弛緩させようと思って放ったジョー

クが逆に作用してしまったようだ。見てみろ彼女の顔を。「この人受験当日に脳の中身をプリンにでも置き換えてきたのかな？」とでも言いたげではないか。軽くゾクゾクする。

「もとい、なにか気がかりな事でもお有りですか？同じ受験生として多少は尽力いたしますよ」

「いや・・・むしろ受験生としてなら手助けはしない様な気がします・・・」

「ははは、なるほど言われてみれば然り！」

「・・・なんだかおかしな人ですね」

おぉ、どうやら軽口が功を奏したようだ。先ほどまで軽く変質者を見るような眼差しだったのが、変だけど良い奴を見るような眼になっている。割合的には変が7でいい奴が3。

「そうですね、いきなり会った人に相談することでも無いんですけど。聞いてもらえますか？」

「ええ、それはもうなんなりと」

「ここまで来てなんですが、受験に受かる気がしなくて・・・。というのも私、所有神業数が1つなんです」

・・・なるほど。

“神業”それは神童と呼ばれる異能力者が所有する超自然的な能力。天野岩学園は日本で頂点に立つ神童育成学校とは先程説明した通りであり、全国1位ともなると集まる神童のレベルも尋常ではない。所得神業数が1つというのは天野岩学園ではあまり優秀とはいえないステータスであり、それで悩んでいるのも納得である。

「確かに所有神業数が1つというのは合格条件に照らしあわせてみても厳しい物がある。“特例階級”に入れるようなレアスキルだと

話は別ですが、その苦悩ぶりをみたところその可能性も低そうだ」
「初対面なのにズバズバ言いますね・・・うぅ・・・そのとおりです・・・」

おっと思わず口から思考がダダ漏れていたようだ。昔からの悪い癖であるがなにぶん止められないから癖である。もう気にしない事にも慣れた。
しかし、それなら力になれるかもしれない・・・
思案中の頭脳とは並列に、俺の眼は異能の力を宿し始める。

（なるほど。これは珍しい）
「あれ・・・気のせいかな？眼の色が変わったような・・・」
「気にしないでください。これは体質の一種ですから」
「はぁ・・・そうですか」

いまいち納得してない様子だが関係ない。俺の神業を知る方法なんてそれこそ親愛なる俺の母でもないかぎり無理なのだから。そして、母と同じ神業を持つ俺だからこそ、解決の糸口が見つかった。

「神業の数ですか。申し訳ないですが私が取り除ける重荷ではなかったようです」
「そうですよね・・・当然です。でも、聞いてもらって少しスッキリしました。ダメで元々、やるからには全力で挑戦します！」
「それは重畳。スッキリといえば、体を動かすこともストレスの軽減には役に立ちますよ。たとえばそこにある石などを思いっきり蹴ってみてはどうです？スッキリするかもしれません」
「そのアイディア頂きました。よ～し、飛んでけぇぇぇえ！！！」

厚手の革靴が固形物を蹴る鈍い音がした。表現するとしたらガンッ！！

・・・スカートなのに思いっきり振りかぶって蹴ったなこの娘！！
最初の印象よりアグレッシブだし、もしかしたらこっちが素なのか？
しかし、これで思惑通り（・・・・）に行動してくれた。後は彼女次第だが、これで大丈夫だろう。

「・・・・・・ッ、おおおおおおおお！？」
「おぉ～、見事なトゥーキック。これはもしかしたらサッカーの才能がお有りですか？」
「そんなことはどうでもいいんです！！神業が、新しい神業が発現しました！！」

まぁそうだろう。なにせ彼女の“天命”成就条件まで残り1蹴りだったんだから。
先ほどの、全力の1蹴りが欲しかったのだ。

「なんだかわかりませんが有難うございます！！これで合格の可能性が2倍・・・いや3倍は固いです！！」

先ほどとは打って変わって狂喜乱舞している。間違いないこっちが素だ。しかし3倍って・・・一体最初の合格率は何％だったんだろうか。２０％くらい？

「それはお目出度い！これで貴方も後顧の憂い無く受験に挑めそうですね」
「はいっ！どうも有難うございます。あのあのわたし、石生　那美（いそうなみ）って言います。よろしければ名前を教えてもらっても？」
「石生那美さんですか。偶然ですね、私も“いそう”なんですよ。伊滄諾です、今後もよろしく。お互いの名前を知ったってことは私の中では友人になったって事とイコールなんだ。これからは敬語抜きでいいかな？石生さん」

「那美でいいよ、私もよろしく！お互い合格したら同じ学園の生徒になるんだし、長い付き合いになるといいね」

こうして彼女、石生那美とのファーストコンタクトは無事に終わった。その後は他愛もない会話をしながら学園へと歩いたものの、５分ほど歩いただけで正門にたどり着いてしまい、実際には雑談をする暇はあまりなかった。正門には広大な学園のマップと６ブロックに分けられた受験会場の詳細が巨大な掲示板に掲載されている。毎年６００人が受験するとされている有名学校だ。複数の会場に分けられるのは当然の処置だろう。

「受験番号だと・・・私は右の受験会場みたい。」

「残念、俺は真っ直ぐ行ったトコみたいだ。それじゃあ、入学試験がんばって」

「うん。そっちもがんばってね！」

とお互い励ましあった後那美さんと別れ、当初の予定通り単身で自らの受験会場へと向かった。

しかし、なかなか可愛い娘だったなぁ・・・

入学試験道中にて（後書き）

初投稿&処女作です。のんびりやっていきたいと思います

入学試験開始

ここで入学試験の内容について説明しておこうと思う。試験は二週間かけて行い、学力・運動能力・神力の3分野に分けられている。

学力は言わずもがな、世間一般のテストと同じで数学や外国語などの合計6科目を2日かけて試験する。

運動能力は体力テストの豪華版と考えて良いだろう。様々な器具を使用し、3日かけて身体能力を計測する。

その2つを合わせた計5日間が初めの一週間である。

そして残りの一週間。ここが登竜門であり天王山。

この世に存在する異能力者。彼らが使用する能力こそ神業であり、その能力値を計測するのが二週間目の神力テストなのだ。

確かに最低限の体力や知識は必要なものの、この学園で最も重視されているのは神力だ。そのため神力の合格に関係する比重も自然高くなり、極端な話神力がずば抜けていれば最初の一週間のテストが零点でも合格する可能性はある。

二週間目からが本番、最初の一週間が仮試験（プレテスト）と呼ばれる由縁はそこにある。

しかし、大多数の人間はそれほど高位の神業を所有していないので仮試験といえども全力で挑戦する。故にこの学園の偏差値はけして低くなく、むしろ進学校としても成り立つ程なのだ。

（俺も余裕ぶってないで、この一週間真面目に頑張るか。最初の日は数学・国語・理科だったかな。）

そう考えながら、筆箱からシャーペンと消しゴムを取り出したのだった。

こうして、初めの一週間は淡々と過ぎていった。

一言だけいっておくと。

他校の体操着は目の保養としては十全だった。

さあ二週間目（本番）開始。慣れとは恐ろしいもので、初日はあれほどぴりぴりしていた受験生達も、三日もすれば緊張感が薄れてしまい、現在では仲のよいグループを作って騒然と喋っている有り様だ。
ま斯く言う俺も親しい奴が１人できた。それが、今俺の横を気だるそうに歩いている彼、和久産巣　和樹（わくむすかずき）だ。受験グループもだが、チェックインしているホテルが一緒だったため、行動を共にしているうちにそれが習慣になってしまった。俺としてはなぜこんな倦怠感丸出しの男なんか、と思わなくもなかったが話してみるとなかなか面白い奴で、今ではお互い下の名前で呼び合う仲になった。ストックホルム症候群的な効果だろうか。
そんなわけで、男２人早朝から学園へと向かっているところだ。

「今から本番だが、調子はどうだ？」
「まぁぼちぼちってとこさ。てめぇはどうなんだ諾」
「俺は最初から問題ないさ。神業も学力も無難にこなせる」
「相変わらず卒のねぇ奴。そのまま留年しねぇもんか」
「和樹こそ、口ではそんな事言いながら今のとこオールクリアじゃないか」
「バカ言え、運動でなんとか盛り直したが学力はさっぱりだぜ」
「答え合わせしか限り、平均７０点だったじゃないか」
「この学校の平均しってんだろ？７０点じゃ１７点足りねぇ」
「まぁ神業で劣ってる生徒はそこらへんでカバーするしかないからな。その点和樹は大丈夫だよ」
「まるで俺の神業を知ってる風な言い方だな？」
「いやいや、唯の勘ってやつさ」

「まったく、食えねぇ野郎だ」

と、他愛のない会話を３０分ほど続けていると、もはや見慣れた感のある天野岩学園の姿が目に映った。と、校門前に見慣れた人影が。どうやらあれは那美さんらしいが、初対面の時の面影は一欠片も残ってはいない。その証拠にほら、なぜか朝からスクワットをしている。やはり彼女も面白い。

「おはよう那美さん。今日もハツラツみたいだね」
「おはよう諾！しかし、朝っぱらから人を焼肉みたいに言わないでよね！！」

ここ一週間で判明したことだが、那美さんの例えツッコミは少々風変わりらしい。それもそれで愛すべき特徴なのだろうか？

「おはっす那美。相変わらず意味わかんねぇなお前」
「ちょっと、和樹君まで人を諾君扱いして！！失礼しちゃうわ」
「それは俺が変人だってことかい？那美さん」

かなり聞き捨てならない。俺は至極全うな人種だと自負している。

「おっと、そりゃ悪かったな那美。謝る」
「わかればいいのよ、わかれば」

一体俺は何をしたんだろうか。変態的な要素はまだまだ出していないはずだ。滲みでているのかもしれない、オーラ的なものが。

「スルーされたことは俺もスルーしょう。しかし那美さん、今日はなぜ校門前でスクワットなんてしてるんだい？」
「理由は２つあるわ。１つ、今日から始まる本番は会場が変わり、

受験生は全員巨大掲示板前に集合するから、諾君たちを校門前で待っていた。２つ目は、本番に備えて体を温めていた。Ｑ．Ｅ．Ｄ．
証明終了！！」
「なるほど。そうなるとおかしいのは君の頭か俺の知識か、どちらかみたいだ」
「安心しな諾。運動能力試験の前ならいざしらず、神力試験前に体を温める必要はねぇ。簡潔に言えば那美の頭が温まってるってことだ」
「誰が間欠泉ですって！！」
そしてやかんのようにピーピー怒っている。熱エネルギーが豊富な人だ。

「わかってないのはそっちの方よ。試験なんてのは気持ちの問題なんだから、ヤル気を出すためには多少の運動が必要なの。でしょ、諾君」
「多分俺に振ったのはこの前の出来事からのインスパイアだと思うんだが、道で石を蹴るのとスクワットを公衆の面前で実行するのは、天と地ほどの差があると思う」
「違いねぇ」
「もういいわダブル頭でっかち！さっさと掲示板前まで行きましょう」
誰のせいで時間を消費したと思っている。なんて言葉を丁寧に咀嚼してから俺達は那美さんの後ろを連れ立って歩く。ちなみに、先ほどの会話中も彼女はスクワットを続けていたことは報告しておこう。
「いやぁ、改めて大きい掲示板ね。」
「確かに。えっと、『本日からの試験内容は神力およびそれに関してである。計測器具に対して受験生が多いため再びグループを２つ

に分け、それぞれ担当の教員が引率する。グループ名簿は右下に表示しているため各自で確認した後時間まで待機しておくこと』だってさ」
「お前よく読めるな。いくらデカイと言ってもここから掲示板まで１０Ｍは離れてるぜ？」
「生まれつき眼が高性能なのさ。グループは・・・俺と和樹がＢグループ、那美さんがＡグループみたい。残念だ」
「ゲッ、また１人だけハブなの？待ってた意味ないじゃない！」
「まぁまぁ、コレばっかりは仕方ないよ」
「仕方ねぇよ」
「１人は精神的に安定しないのよ！つまり寂しい」
「そんなはっちゃけてるくせに、お前人見知りだもんな。」
「うきーーー！！」

【ピンポンパンポン】
何時の時代も変わらない趣きのある校内放送開始音が鳴り響く。もう時間か。
【これより神力検査を行います。Ａグループは八咫（やた）教諭と共に体育館、Ｂグループは高央（たかお）教諭と共に格技場へと向かってください。】

「俺たちはＢグループだったな」
「あぁ、そんなわけで那美さん。ここでお別れだけど、頑張ってね」
「言われずもがな！！お二人とも、入学式で会いましょう！！」
そう元気に言い放ちながら、嵐のように那美さんは去っていった。
入学式まで会わないつもりらしいけど、お昼時とか遭遇しそうな気がする。

そうして格技場へと場面が変わる。
日本有数の学校なだけあって格技場も通常の規模ではないらしい。大きな正面入り口（余談だがスイングドアが６つ付いていた）を抜けると正面と左右合計３つの引き戸に加え、二階へ続いているであろう螺旋階段がテラス中央から垂直に上へと伸びている。ここでは柔道・剣道・弓道などの武道はもちろんのこと、ダンス、マーチングバンドなどの演武会に、コンサートや格闘技（ボクシング、レスリング、総合格闘技）などなど、多種多様な用途に用いられるらしい。格技場というよりは日本武道館のような佇まいである。これを見れば、いかに今の日本が神童育成に力を入れているかがわかろうというモノだ。
俺たちが使用するのは玄関から入って正面の引き戸を開けた先、どうやら格技場で２番目に大きい部屋らしい（引率の教師が紹介していた。たしか高央教諭だっけか）。３００人強が入ってもまだ余裕があるこの部屋は、床が全て畳になっている事からみても、柔道などの使用目的で作られたのであろう。しかし、一般的な格技場とは規模がケタ違いである。イメージとしては高級旅館の宴会広場に近い。
よくみると、壁際に６台ほど機械が置いてある。いや、置いてあるとは適切ではなく、事実を忠実に伝えるためにはこう表現しなければならないだろう。浮いている（・・・・・）と。
大きさはバスケットボールと同程度、球状で一見真っ白い玉だが、集中して観察するとシャボン玉のように球の表面に幾何学模様が回っている。確かあれは・・・
「総合神力計測器。通称ＴＧＰＭか」
「ＴＧＰＭって、最近軍が開発したっていやつか？」
「まさに。個人が所有する神業を数値化するのはもちろんのこと、

その特性から応用力まで大まかに計測できる最新機器。今まで他人の神業を知ることが難しかったために起こってしまった事件を元に、それらを防ぐ手立てとして開発されたのがあれさ」

「軍用機器をあんだけ用意するなんて、つくづく食えねぇぜこの学園」

「あれ１つで新規の学校が建設できるらしい」

「全体的にアホだな、ここは」

最後の意見には全面的に同意しておこう。

どうやら前列のＴＧＰＭによる検査が開始されたようだ。一人につき１０分ほどの時間を要するため、最後の検査が終わるまで８時間以上。今日はこの検査だけで一日終わりそうだ。

一応整理券のようなものが配られているため、時間に注意すれば昼食なり散歩なり自由に行動できそうだ。和樹と俺は連番なため、予定検査時間もほぼ同じ。

さて、どうやって時間を潰そうか・・・

邂逅と検査

自分の検査時間がくるまで、校内を散策する事にした。
只でさえ広大な敷地だ。試験中は指定された会場しか見ていないため大部分の施設を把握していないし、在校生は試験期間中休み。危険物が置いてある場所にさえ近づかなければ少しくらい見学しても大丈夫だろう。
今は格技場をでて西、掲示板の所から北の場所に位置する二号館の中を歩いている。校舎本体は一号館から三号館までの本館と四号館から六号館までの副館で構成されており、本館では授業、副館では実習と用途別に使い分けているらしい。
つくづく経費削減とは対局な学園である。

一階二階とブラブラ歩き、二三階へと足を踏み入れた時だ。大きな違和感を感じた。

これは・・・紫乃宮(ゆかりのみや)家の守護領域？

検証するため神業を発現。右手を軽く握り、周囲の空気を集める。

（やはり。普段より風の巡りが悪い）

大幅な神業のランクダウンは紫乃宮家の守護領域たる証拠。しかし、どうしてこの場所が？
訝しんでいると、前方から声がした

「どなたかそこにいらっしゃるのでしょう。遠慮せず入ってらっしゃい」

向きから察するに右前方のドアからしい。近づいてみると、ドアプレートには“黒袍会(こくほうかい)”と書いてある。黒袍会、一般的には生徒会と呼ばれる組織だが、この学園ではそう呼称している。そういえば、今代の黒袍長は紫乃宮家の才女だと聞いた気がする。今更思い出すとは俺の記憶力も捨てたものらしい。捨ててておこう。

（相手が紫乃宮家なら、遠慮する必要もないか）

一応周りを確認してみたが俺以外に人の姿はない。なら、間違いなく先程のは俺に言ったセリフだろう。ドアノブを回し、中に入る。部屋の中には一人の女性しか確認できなかった。いくつかのワーキングデスクが並ぶ中、一際大きなそれに向かいながら作業をしている姿は、さながら休日に詩を嗜んでいる令嬢といった風情だ。使用しているデスクが他のと違い孤立している所から、この女性が黒袍長であることが十分に予想できる。それに、彼女纏う雰囲気が十二分に物語っている。彼女が7華族が1つ、虹神の建築士(アーキテクチャ)と呼ばれる紫乃宮家の一員だと。

「あら、見ない顔ですわ。それにその制服、もしかしなくても受験生ですわね」

作業する手を止めてこちらに目を向ける彼女。目が合うとより実感できる。彼女がこの場を改変している人物だと。

「お初にお目にかかります。見たところアナタお一人のようですが、休日に事務仕事ですか？」

「えぇ、作業が滞っていますの。昨日もその前もサービス残業。もう目が廻ってしまいますわ」

「それはそれは、心中お察しします。おっと、挨拶が遅れてしまいました。私は伊滄諾と申します」

「これはご丁寧に。ワタクシ、この学園で黒袍長を勤める紫乃宮(ゆかりのみや)知流姫(ちるひめ)と申しますわ」

やはり紫乃宮、それも知流姫か。直系の、それも長女とは。直にお会いしたことはなかったが、話だけは聞いている。別名“完全無欠の箱要り娘(ブラックボックス)”

「伊滄・・・もしかしてあの（・・）伊滄家かしら？“神眼”の」

「お恥ずかしながら。その伊滄家で間違い有りません。母の聖がお世話になっております」

「まぁまぁ、それは失礼してしまいました。聖さんには昔から懇意にさせていただいてますわ。」

このやり取りで判ると思う。紫乃宮と伊創家は昔から知らない中ではないのだ。もっとも、それは母である伊滄聖のおかげであり、俺自信はあまり紫乃宮に関わったことがない。それでも、両家はお互い対等な関係として互いに接しているため、俺もその例に従ったほうがいいだろう。

「貴方のお話は母から良く聞いています。とても優秀な女性だと」

「お恥ずかしいですわ。ワタクシは何も優れてなどおりません。全てはあなたのお母様のおかげです」

「いえいえご謙遜を」

「真実ですわ」

「おっと、そういえば」

このままでは話が停滞してしまいそうな気配がしたので、話題を変える。

「この階、このフロアだけ守護効果が発生しているようですね。

もしかして、この二号館は紫乃宮が手がけたのですか？」
「御名答です。しかし、ここだけじゃありませんわ。体育館から格技場から全て、この学園内の建築物は私達紫乃宮家が創造いたしました。」
唖然とする。紫乃宮の固有技が、まさかこれほどの物質創造能力とは。
「・・・改めて規格外ですね。虹神と二氏神（にじがみ）の仇華族（きゅうかぞく）は」
「ま私は先代の偉功を借りているだけに過ぎませんの。今の私ではアレらを創造することは想像すら難しいですわ。」
そう公言するわりには、全身から自信が溢れているように見受けられる。一筋縄ではいかないオーラである。
「ちなみに、校内は有事の際でない限り神業使用を許可しておりませんの。次からは注意しておいてもらえませんかしら」
「重ね重ね申し訳ありません。次回から考慮します」
「それだけ伝えておきたかったのよ。判っていただけたようでて何よりですわ」
「はい。しっかりと記憶しておきます」
記憶はさっき捨てた気がするけど。
後で拾っておこう。
さて、挨拶も済んだことだ。これ以上事務仕事の邪魔にならない内にさっさと退場したほうがいいだろう。
「では、私はこれで失礼いたします」
「散歩中にごめんなさいね。合格したらどうぞ宜しく。貴方なら

大丈夫だと思いますわ」
「こちらこそ、その時はお願いします。先輩」
軽くお辞儀をしながら後ろ手にドアノブを捻り、後退するように部屋を出た。

そうして、予想外の会遇は終わった。
ふと時計を見ると１０時３０分を過ぎている。検査開始が九時で、俺の神力検査待ち時間は２時間ほど。そろそろ格技場へ戻ったほうが良さそうだ。
入学前に黒袍長と知り合えたのは大きな収穫。やはり、時間は有意義に使うものだな。
満足気に微笑みながら、俺は目的地までの移動を開始した。

「おう、やっと来たか諾。次は俺たちの番だぜ」
「ギリギリだったか。心配かけて悪かったな」
「別に心配してねぇよ。それより、なにか収穫でもあったか？」
「美人とお近づきになれた」
「なんだと！チクショウてめぇについていきゃ良かった」
「お前はどうだったんだ」
「どうもこうも、見に行った国営農場はすげぇ荒れてるし、園芸部は初心者ばかりで問題外。あれじゃあ数年後は世紀末並の荒野になるぜ」
「そんなに酷かったのか」
「ま、俺が入学すれば豊作まちがいねぇがな」

「そのためには検査だ。どうやら俺たちの番らしいぞ」

どうやら俺たちの前のグループが検査を終えたらしい。すぐに次の検査準備を開始し、程なく完了した。
名簿を持った高央教諭（黒髪ショートで切れ目が特徴的なお姉さん系美人だ）が順に名前を読んでいく。

「次！受験番号３６２番。伊滄諾。三番機器の前に」
「それじゃあ行こうか」
「しくじんなよ」
「ただの検査さ。失敗も何もない」
「次！受験番号３６３番。和久産巣　和樹。四番機器の前に」
「うっす！」

６人全ての名前が呼ばれ、それぞれが機器の前に立つ。

「各自それぞれ所定の位置に着いたな！よし、これより神力検査を行う。プライバシーを考慮して、検査中は使用者以外機器に近づけなくなるから注意するように。」

今の時代、誰がどのような神業を所有しているかなんてのは特秘事項の一つだ。確かに、軍用機器で調べられたデータを他人に知られるのは勘弁願いたい。

「それでは検査（スキャン）を開始する。それぞれ割り振られた機器に両手を当てて受験番号と名前を呟け。あとは自動で検査される。では、始め！」

すると、左右から口々に受験番号と名前を囁く声が聞こえる。

（俺も始めるか。設定は2・・・いや、念のために3だな。４以上だと下手したら特別階級になってしまうかもしれない。・・・よし、これで大丈夫だろう）

「おい伊滄受験生！後がつかえてるんだ、早く始めたまえ」

おっと、慎重に考えすぎたようだ。
すぐさま両手をＴＧＰＭに当てる。

「受験番号３２６番。伊創諾。」

名前を言い終わるやいなや、先ほどまで球表面を無軌道に動き回っていた幾何学的模様が手の接着面に集まってくる。手のひらが若干熱を感じ始めるとともに、体全体にじんわりとした異物感を確認する。

どうもこの感覚は慣れない。体中をまさぐられているような感触だ。実家にある旧式のＴＧＰＭと同じ・・・。これなら俺の神業も通用するだろう。

七分ほど経っただろうか。全身に巡る不快感が小さくなり、消えた。そして、球体に文字が表示され始める。

《総合神力　――１３０ＧＰ　天人》
《分類　――　身体能力　Ａ・風遣い　Ａ・観察眼　Ａ》
《危険度　――Ｃランク》
《身長　――　１７２ｃｍ》
《体重　――６３？》
《身体異常　――無し》

最新式なだけあって神業の名称まで判明するのか。実家にあるタイ

プと若干違うが、俺の神業は上手く作用しているらしい。１３０ＧＰなら十分だろう。
神力関係以外にも色々と表示されているが、特に重要ではないため気に掛けない。

「どうやら全員の検査が終わったようなので、両手を機器から離し速やかに検査の邪魔にならない場所へ移動しなさい。」

指示通り、和樹を拾って格技場の外へ出る。今日はこれ以上学園ですることが無くなったため、帰り道で昼食を食べ、そのままホテルへと帰ることにした。

遡逆と検査（後書き）

読んでいただきありがとうございます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7456x/

そして天命を成就する

2011年10月26日04時05分発行